

## IV 残された問題点

今回、対象として取り上げたアイゴ類、ハタ類、ティラピア類の今後の問題点について述べる。

アイゴ類の給餌養殖において植物餌料の利用が可能であると考えられたが、今回の試験ではアオノリ以外での成長はみられなかった。しかし、自然状態では各種の藻類を餌料としていることが観察されており、アオノリ以外の各種の藻類の利用価値についても詳しく検討する必要があると思われる。その際、供試魚ができるだけストレスから解放された状態で試験を行わなければならない。

資源培養による増殖については今回行い得なかったが、今後の問題として資源調査や餌料としての藻場調査及び藻場造成等についても検討を要すると思われる。

ハタ類では、カンモンハタを用いたティラピア類との混養方式においてティラピアが餌料として有効であると考えられたが、カンモンハタは小型種であるため今後大型種のハタ類について検討する必要がある。又、ハタ類以外の肉食性魚類やイカ類についても検討を要するものと思われる。礁湖における肉食性魚類及びイカ類の食性調査を行うことによりティラピアを餌料として利用できる種の選択の可能性もあると思われる。

又、餌料としてのティラピア類は天然では礁湖に棲息しておらず汽水域を好むので、全海水馴化したティラピアの礁湖における行動の調査も必要と思われる。今回、餌料としてのティラピア類は主にモザンビカを用いたが今後ジリーについても検討すべきである。

ティラピア・ニロチカについては海水での養殖を試みたが、海水養殖は困難であると思われた。しかし、塩分の薄い海水ではほぼ正常に成長したので汽水域への展開は可能であると思われた。汽水域での飼育では繁殖を抑え、成長に影響をおよぼさない塩分濃度の上限下限について検討する必要がある。更に越冬時の塩分濃度の影響についても検討を要すると思われる。又、全海水での飼育については、歴代育種により耐海水性品種を作り出す必要がある。

以上のように数種の魚類について基礎的な室内試験の結果を得たが、具体的に礁湖へ展開する手法は見い出すには至らなかった。今後は更に対象魚種の選択の検討を重ねると同時に、礁湖の増養殖魚場としての特性をよく把握するための野外調査も行う必要があると考えられた。